

仰げば尊し

登校日。

急に涼しくなってきたようで、部室の窓から見下ろす町の人々の装いに一枚上着が追加されている。そういえば、最近、夜にコオロギの声をよく聞くようになった気もする。

秋が近いのか。

「楓さん。声が出せなくなっただけとお聞きしましたが大丈夫ですか……？」

ある事件によって、一時的に声を失っていたことがあるという部活仲間の小柄な少女が心配そうに話しかける。

【機械だからね。そういうこともあるさ。】

「フフツ、そうでした。でも無理はしちゃダメですからね？」

ピツと人差し指を立てて犬吠埼妹に釘を刺される。

こういうとき彼女たちは、私とは違って、本当に本心から身を案じているんだろうな。

とても善良で触れ難い。

しかし、みんな口を揃えて『無理はするな』と言ってくるが、まさか私が努力家にも

見えるのだろうか？ 私は君たちとは違う。

私は私にできることをできるだけ行おうことにしてはいるが『できるだけ』というところが重要で、できるだけ≠極力なので基本的に私は頑張らない。

努力とか頑張るのとか嫌いなんすよ。出来ることなら死ぬまで眠っていたい。

そんな感じの実年齢四〇過ぎの中学三年生である。

ちなみに、年を数えていなかったたので四〇過ぎということしか最早分らない。

肉親とか兄妹とかはタイムリープ？の際に、なんか知らんが家ごと消し飛んだ。愉快。

現在の仕事は：まあ、この事象に関連して私の周囲に発生する諸々の情報提供や調査と

いったところだな。黄泉路探索もその遠縁。

肉があったころは男性体だったが、現在は少女型の義体である。

特別女装趣味があったというわけではないが、触媒となる脳細胞一粒、骨の一欠さえ残っていない今となっては依り代の性質都合上男体は難しいそうだ。

そもそも、私がミンチになった際に、偶然用意していた義体にどういわけか私が入った：宿った？だけで、義体の何処に私が宿っているのかも分からんだ。状態の変更は

慎重に最小限にしなければ、うっかり消滅しかねない。

補足として、私のこの義体にはもう一つ人格が宿っている。

宿っているというか、憑依しているというか、神霊で英霊の神奈という少女が降りている。性格は少々悪戯っ子ではあるものの、その実、神か御仏かといった具合のとても善い子である。

この前の結城さん達の企てによって、漸く（ようやく）普通に表に出て来るようになって、それまでは彼女の遠慮しいな性格のため殆ど口を開かなかった。

別にこの身体は私の肉体でもなければ、私の所有物というわけでもないのだから主体が私である必要は全くないし、既に死んでいる私のことなど本当に気にしなくてよいのに。

*

『地獄について調べ直した方が良いな』ということで、校内に所蔵されている図書室へ足を運ぶ。

まあ、部室でサーフェス広げて検索でもよいのだが。

まあ：強いて言えば、現在私にはコミュニケーション障害が発生しているので、調べ物を行いながら人懐っこい部員たちの相手もというのが少し難しい。

なので、図書室で調べることにした。ということにする。

図書室の描写を入れたいところではある。

しかし、この義体は決して劣ったモノではないが、それでも漫画に描かれるような超機能なモノではなく、ヒトの五感を置換するセンサも義体の運用に必要な最低限しか積まれてはいないため、古本特有の芳香に浸ることもなく、残暑の残る日中の廊下の蒸し暑さや、図書室の扉を開けた際に廊下に溢れ出る冷房の涼しさを感じることも無いし、圧力センサや重心を取るための機能はあるが、二つの本を手を取ったときの『こっちの本は挿絵が多そうだな』などとインクによる重みの違いに小さな期待を浮かばせることも無い。

義体という分厚い鎧に阻まれて何一つ触れることは叶わず、他人の一生を靄の掛かったレンズ一枚隔てて眺めているような具合で、何に対しても実感が得られない。

自身のことのはずであるのに他人事を感じる。

『肉体の枷から解き放たれ、俯瞰者へと成り上がったのだ』とでも謂えば、偉業のように聞こえなくもないが、その実、液晶の向こう側の登場人物たちを傍観しているのと変わらない。

まして操縦しているこの身体と、俯瞰者的私の座標が割と頻繁にズレたりして欠陥と言

わざるを得ない。

日常の些細な快感の一切を失い、三大欲求を満たす手段もすべて失うというのは、健全なものが想像するのは少し難しいかもしれない。 喩えるなら、悪い意味で夢の中のようにであり、活動の多くを身体性に頼っている者や、欲求の内、知識欲の比重が小さい者たちであったなら、その重篤な精神負荷に耐えられなかったかもしれない。

幸か不幸か、まあ不幸にも、私は私の身体がこうなるより以前から体験済みであったので重症には至っていない。

別に慣れたということではなく、精神的な作用で虚無に落とされた経験よりも、物理的に欠損している現在の方が見切りが付くだけ楽なのだ。

目に見えない痛みより、目に見える痛みの方が処理し易いのと似ているな。

欲求を満たせないのは確かに不満足で、重くストレスが押し掛かっているが、欲求そのものを失ってしまう方がずっと辛く、苦しく、悲しく、そして何より恐ろしい。

まあ：物理的に脳無しなので、何時全ての感覚が破綻してもなんら不思議は無いが：

適当な席に着き、机の上に仏教に関する書物とサーフェスを広げる。

地獄には大別して「冷たい地獄」と「熱い地獄」と、その周りに設置されている小地獄とがあるそうだ。針山だとか、血の池などが小地獄にあたる。

私が向かうのは黄泉ではあるが、神話というのは己の嚙こそが普遍的で包括的な真実で真理であるとしても言わんばかりに他所の逸話を取り込む性質がある。あった。過去形。

実際に三百年前に神が目に見える形で物理的に顕現してからは『世界に点在していた天や地獄などの概念が重なるのは、名称が異なるだけで示しているものが同一のものだからではないだろうか?』という説が主流となっている。

当の死後世の住人であるあの少女の言うところでは『地獄ではなく黄泉の国だ』とのことだが、剣山があるのならやはり何処か重なるところもあるのだろうか。



1 頬部陀 (あぶた) 極寒により全身に水泡 (アブタ) ができる。

2 尼刺部陀 (にらぶた) 極寒により出来た水泡が裂ける。

3 頬嘶吒 (あせった) 苦しみに耐えられず呻き声をあげる。

4 隴隴婆（かかば）

5 虎虎婆（ここば）

6 喞鉢羅（うばら）

極寒により身が裂け折れる。

7 鉢特摩（はどま）

8 摩訶鉢特摩（まかはどま）

……記述者が古代日本人で、極寒の描写が難しかったのだろう。

熱い方の地獄に対して情報量がとても少ない。いや、元を辿ると暑い気候の地域で発
生した思想なので元々記述が少なかったのかもしれない。

例えば、アセツタ・カカバ・ココバなどは、零れる呻き声でしか違いが表現されていな
い。

熱い方の地獄八層。一層目は等活地獄。

殺生罪担当の地獄であり、憤怒の衝動に支配され、罪人同士で殺し合い続ける地獄であ
る。稀に衝動にのまれない者もいるそうだが、そういうものは獄卒が切り裂いたり殴つ
て粉砕したりするそうさ。

等活という名称は『どの様な死に方をして、何処からともなく吹き込む涼しげな風に

よって等しく再生される』ところから。

まあ、それは冷たい方も含めた全ての層共通の性質であるので、ようは個性が無く、浅い層の地獄ということ。

二層目は黒縄地獄（こくじょうじごく）。殺生十竊盜罪担当。

焼けた鉄の地面に、焼いた縄で墨入れして焼けた刃で切断されたり、鑄熔かした鉄の上に張ったワイヤーを綱渡りさせられたりするとある。

加熱されて小道具も増えたな。

焼けた縄で磔にするのは分かるが、刃物を焼く意味はあるのだろうか？

焼けた鉄板に磔にした時点で既に焼かれているのだから、私なら切開した傷口に鑢（やすり）をあてる。同種の苦痛を与え続けてもつまらないだろうに。

三層目は衆合地獄。殺生十竊盜十姦淫罪担当。

ここの基本は鉄塊による圧殺だが、他に変わった責め苦がある。

この層には剃刀の様に鋭い葉を付けた鉄の木が生えていて、その木の天辺に天女の様に

美しい女の幻影が罪人を誘惑しており、誘われたものは全身を切り刻まれながら木を登り、登り切ると目の前の天女は消え失せ、今度は木の下に幻が現れて罪人を煽情的に誘い、飛び降りるとまた木の上にと、罪人は己の欲によつて苦しみ続けるという趣向の地獄だ。この、衝動を強要する性質は等活地獄でもあつたな。

四層目は叫喚地獄。殺生・窃盜・姦淫・酒（藥毒）を盛ることで騙したり、他者を貶めたものが落ちる地獄。地面は焼けた鉄で出来ていて、釜茹でや鉄牢での窯焼きの刑が行われており、責め苦から逃げ出すと、弓矢や金棒を持った頭金・赤服・灼眼（目から火を放つ）の獄卒たちに追ひ回されるそうだ。

五層目は大叫喚地獄。殺生・窃盜・姦淫・酒・詐欺罪担当。叫喚地獄の上位苦。

六層目は焦熱地獄。殺生・窃盜・姦淫・酒・詐欺・教唆罪担当。

この辺りからはもう、ただひたすら熱いということしか書かれなくなってくる。

七層目は大焦熱地獄。殺生・窃盜・姦淫・酒・詐欺・教唆・尼僧や未成年の少女などの清い者を穢す罪。焦熱地獄の上位苦。

最下層の阿鼻地獄（あびじごく）。いわゆる無間地獄のことであり、殺生、窃盜、姦淫、酒、詐欺、教唆、清きを穢す、十破戒と親殺しや聖人殺しの罪。五逆と法傍罪を担当しており、毒と火を吐く鉄蜂や大蛇が生息していたり、火を吐く64眼の鬼がいる。

無間地獄とは言うが、無間であって無限ではないので、349京年？くらい責め苦を受ければ解放されるらしい。

阿鼻地獄に着くまで（自由落下で）2000年を要したり、仏教は時間周りがインフレしてるんだよなあ……過去現在未来を自由に行き来する明王だか菩薩だかもいた気がするし、64億年かかるっていう弥勒さんの修行が可愛く見えるぜ。

まあ、悔い改めない限りどの層の地獄でも刑期加算され続けるし、逆に悔い改めれば削られたり案外融通の利く場所だから、時間とか数字とかそんな些細なことに囚われてはならんのだろう。

見ようによっては『如何なる大罪であろうと赦されぬ罪は無いのだ』と言っている様にも取れる。



こんなものかな。

一通り調べが付いたので、人の消えた静かな図書室で寛ぎ、思案を巡らせる。

直接的な加害行為よりも『騙したり唆したり精神を貶めること』を大罪と判定しているようだった。

現在もルールが変わっていないのなら、私は一層か二層が精々だなあ。

しかし、単なる親殺しが聖人殺しと同等というのは解せないな。

等活で良いでしょうに。

子殺しの罪が親殺しと同等でないのも気に入らない。

仏教には輪廻転生と解脱（げだつ）という概念がある。

世界は六つの階層に分かれており、また大別して天・地・人の三つの地獄から成る地獄から地獄への永劫回帰（輪廻転生）を断ち、二度と苦しみの世界に生まれてしまわぬように悟りを得て、涅槃（ねはん）という永遠の安らぎを得ようというもの。

仏教の始まりは、凡そ五千年前？のインダス文明期の…なんだったか忘れてしまったが、そこからヴェーダ聖典を基に『全ての生命は産まれた時点で、転生前を含めた過去の

業（カルマ）によって境遇が決定されているのだ』と説くバラモン教が生まれ、バラモンの『裕福な生まれも貧しい生まれも等しく己の業のせいであり、己の責任だ』という思想は、当時の階級社会の権力者たちに都合の良いものであったが、恵まれない大勢にとってはお受け入れ難い思想でもあった為、これに対抗する沙門が生まれる。

シッダルタが整頓した仏教もこの沙門に当たり、バラモンの根源的思想であり天道を最上位の極楽と定める輪廻転生を否定する解脱の概念が発明された。

生まれてしまったことが全ての辛苦の始まりであり、産まれなくなることを目指す仏教では、子を産むことは地獄に落とすと同様に罪深いと捉えることが可能であり、反出生思想に繋がる文脈が内在する。

であるなら、全ての親は子から赦しを得られるまで、子を産んだ罪を背負っていることを肝に銘じなければならぬだろうと私は考える。

生誕に感謝し、出生に詫び入り、己らの堪え難い欲求に他人を巻き込んでしまったことに対し頭を垂れ、伏して許しを乞え。

さすれば決して人として許しはしないが、神として清算してやらんこともない。

まあ、私の恨み憎しみは置いておき、仏教では人が生きる上で避けられない辛苦を“生老病死”と言い、この四苦に以降の四つを合わせて四苦八苦と表す。

愛別離苦（あいべつりく。愛するものと離別する（価値あるものを失う）苦しみ）
怨憎会苦（おんぞうえく。憎らしいものに遭い、憎しみが起こってしまう苦しみ）

求不得苦（ぐふとくく。欲するものが手に入らない苦しみ）

五蘊盛苦（ごうんじょうく。己の心身が思う様にならない苦しみ）

簡便にまとめると、喪失と飢餓感と、衝動的で操作性最悪で制御不能な自己のことだ。

殴られれば痛いし怪我もする。

眨められ尊厳を傷付けられれば脳細胞は比例して死滅し、深く社会不安が刻まれる。

ヒトはそう反応する様に出来ている。

『氣の持ちようだ』『捉え方次第だ』と怪我を怪我ではないと思ひ込んだところで、擦りむいた膝小僧からは出血し続け、地面に突き立てた掌には砂礫が突き刺さっている。

確かに少々の怪我なら、何の処置もせずとも自然治癒するかもしれない。

しかし、どんなに小さな傷であろうと破傷風で死ぬことはあるし、傷口が小さいだけで本当は内臓まで深く裂けているかもしれない。

怪我（事実）を怪我（事実）と認めなければ治療はできない。

認知を歪めて事実を否認し、虚勢を纏うことは強さではない。

それはただの適応障害だ。

そして求める（期待する）ことは不安へ転じ、苦しみとなる。

人類は価値あるものを持っていないことに苦しみ、求めて手に入らないことに苦しみ、価値あるものを持っていても失うことに恐怖（不安）を覚え、諸行無常の理にて全てを喪失して舌を嘔む。

幸も不幸も仏教的には苦でしかない。

傷を背負っている私たちは『生きることは苦だ』と、事実を認めることから始める必要があるのでないだろうか。

*

黄泉下りから3日が経った。

私は義体なので、機能上眠ることも眠くなることも無いはずなのだが、とても眠い。

彼岸から睡魔でも連れて来てしまっただろうか？

現在の成りになってからは、特別教室で授業を受けている。と言っても、私はすでに義務教育を修了して必要でないため、形式的なものである。

……実は私は算数が分からないので、順立てての授業は復習として個人的にとっても有り難かったりもするがそれは秘密にしている。

私の得意科目は国語と理科。体育はまあ、中の中くらいのそこそこだった。

私には友達がいなかったので練習機会に恵まれなかったが、マット運動や棒高跳びなどの相手を必要としない個人技であれば多少できた。

そういった技能が授業で公開されると虐めっ子たちが大人しくなったりして嗤笑（ししように）を禁じ得ないのだが、讚中ではそもそも虐めっ子の存在を確認できていないので今は置いておく。

翻って苦手科目は英語と数学である。

好奇心は強いが学習意欲は低いという平均的な思考回路を持つ私は、テスト勉強など当然行わないので毎回赤点を取り、そうして長期的に平均点を下げることによって教師にテストのレベルを自主的に下げさせて、必要に応じて気まぐれに点数を上げたりしていた。

資格試験の類は好奇心で受けるので全て一発合格。

結論すると私は、どこのクラスにも何人かは居る典型的な副強化が強いタイプ——

「うっちー。 うっちーさーん？」

んお…？

「何をボケっとしてるのよ」

「何か考え事か？」

彼女たちは私の事情を知っている特別教室の三年生で、フランクにあだ名で話しかけてきたのは銀髪黄眼、エセ関西弁を自在に操る笑いのツポが謎な漫才狂いの桐生静（きりゆうしずか）。

私はお笑いに興味はないが笑点は好き。

ところで『きりゆう』って平仮名で書くと『きゅうり』みたいだなんてことは思っても決して口にはしてはいけないよ。

現在私たちは自習中で授業中だが、そんなことは関係なく基本的に声のボリュームを抑え気味にチューニングしている彼女は、ちょっと内向的で割と辛辣なツッコミもするけれど、根は優しく、いっそ愛おしい黒髪長髪ツンデレ娘の郡千景（こおりちかげ）。

大鎌を振り抜くが如く、遠慮なくバツサリ斬り捨てるツッコミが少し胸に痛くて快感を

覚えたりもする。本人は『そこまではない』と謙遜するが、趣味のゲームの腕はプロ級である。と私は思う。

言葉少ない彼女のその御心（みこころ）は、大海のようできて穏やかに紡がれる。

日に焼けた小麦色の肌が張りのある艶をもつて照り返し、170cm台という高身長を誇り、美しい灰髪を潮風に靡かせる佇まいは凛々しく、海へ帰る夕日を見つめて黄昏る（たそがれる）横顔は神妙で、乙女たちの心を捉えて離さないのが古波蔵棗（こはぐらなつめ）。

沖縄生まれで、冬になると『人は炬燵なくしては生きられない』などと述べながら極寒の海に潜るといふ生粋の海人（うみんちゆ）である。正気を疑う。

私は北海道には行ったことがあるが、沖縄はまだ無い。

ヤンバルオオムカデは一度は見ておきたいわね。

【まあ、色々だね】

「悩み事なら相談に乗りましたよ、楓さん？」

彼女で特別教室の三年生は打ち止め。

お嬢様言葉を遣う、金髪エセお嬢様の弥勒夕海子（みろくゆみこ）だ。

容姿端麗で手足もすらりと長く、日々の努力で作り上げたであろうボディラインは美しい。言葉遣いも容姿に劣らず雅（みやび）で丁寧で素敵だし、立ち居振る舞いも素晴らしい。口元の黒子（ほくろ）もセクシーだ。

正に良家の子女たらんという彼女の志には『全く見事だ』と賛辞の言の葉を紡がずにはられない。そんな彼女のメンタリテイを一言で表すなら『しかし脳筋である』というのが、また愛おしさに拍車をかけるのである。

精錬で硬くて強いというのは間違いなく力だ。

しかしそれは個人技としての強さであり、その堅さはときより人を遠ざける。

独りで達成できることには限りがあり、隙を持ち、愛嬌を持つというのは才能なのだ。

故に、たとえ君が血の滲む努力を重ね、頂に手を伸ばし続けて一向に欲するところに届かなかつたとしても問題は無い。愛らしい君の力不足は、君の愛らしさに惹かれて集まつた仲間たちが補つてくれるだろう。

【いや……弥勒さんは素敵だなんて】

「まあまあ♪ ありがとう存じますわ、楓さん♪」

「はあ……例の調査のことでしょうか？ 煙に巻くばかりでないで、そろそろ語つたらどうなの？」

「うん？ それはたしか、真つ暗で良く分からなかつたと言つていなかつたか？」

「『真つ暗で見えなかつた』ということは、向こうでは暗視機能のある義体ではなかつたという事。周りが見えなくとも彼自身のことは話せるはずよ」

今日のこの時間は、学年ごとに机をくっ付けて、分からないところを教え合うという授業スタイルだったために、雑談交じりに厄介な話題も発生し得た。

何でもないときならいざ知らず、隠匿すべきことがある現状では正直面倒くさい。

郡さんはやっぱりその辺の後ろめたさに気付いてしまつて困るなあ。

郡さんにだけ話すならともかく、この教室には他の皆さんもいらっしやるんですよ。どうしたものか。

【うーん…難しい…】

「私もちゃんと聞けてないし、教えてよ、楓ちゃん。『悩んだら相談』だよ?」

私の結論は出ているので悩んではないのだが、神奈さんまで出てきたとあっては……
何か…何かないか……

「楓…：楓はまた、私たちのことを想って秘密にしているんだろう?」

心配するな。心の準備は出来ている」

「…まあ、あっちに行けるんは、うっちーだけやし、ウチらに話すんが逆に重荷になるよ
うやったら話さんでエエけども。専門家の知識が必要になったり、またドツボに嵌まり
そうになったら遠慮せんと言いや?」

「そうですね、楓さん? 試練の厳しさも、楓さんのお悩みもすべて、この弥ろ「氏紙
さん! 何か悩んでるなら私が力になるよ!!」

弥勒さんの名乗りを遮り、我こそが協力致そう! (意識) と自己を主張した彼女は、特別教室二年生の加賀城雀(かがじょうすずめ)。

弥勒さんは声が大きいので、話を聞き付けて飛んで来たのだろう。雀だけに。

加賀城はとても声が大きいので、現在私は彼女らの声量により呼び寄せられるであろう。一団に機密情報が暴かれてしまう危機に直面している。予測可能で回避不可能。

今こそ助けが必要なきだが、協力を申し出ている二人こそが相對している危機なのである。閃いた。

【すみません：落ち着いて聞いてほしいのですが、実は地獄の十王たちとの盟約で、今は話せないことがあまりにも多いのです…。この会話もきつと聞かれています…。断片的に話してもきつと皆さんを心配させてしまうだけでしょ…。なので今は私を信じて：待っていて頂けませんか…？】

あの少女を地獄の十王に見立てた、大嘘の様で、まるつきり嘘とも言い切れる嘘だ。

「氏紙さんが地獄に…？」

【私は必ず貴女のもとに帰って来ます。だから】

加賀城を圧殺しないように、しかし力強く抱擁する。

そして、必ず黄泉帰るとは言っていない。

「ぐじしさああん！」

「そういうことでしたら、わたくしも信じて待っておりますわ……必ず！生きて帰還してくださいますし……！」

ニヤリと意味有り気に口角を上げて、そっと親指を立てて見せる。

必ず生きて帰るなんて約束は致しかねるので頷くことはせず、なんかそれっぽいモーシヨンで答えるが、話の流れ的に同意されたと勘違いしてくれるだろう。郡さんから冷やかな視線を感じるがきつと気のせいだ、おつと目が合ってしまった照れちゃうわ……………

… あ あ あ あ、痛い！ はつずかしい……………！ なんだ、地獄の十王との盟約って

阿保か…っ!!

正気に戻ってしまった。

「…余所でやってくれないかしら」

黄泉下りから5日が経った。

「——ちゃん」

「——楓ちゃん？」

あ【はい 何でしょうか神奈さん】

「眠いの？」

【はい。とても】

そういえば、神奈さんは喋れているんだな。

「…楓ちゃん」

【はい】

「何があつたか、どうしても話せないの…?」

「…やはり霊体?の神奈さんには分かつてしまうか…?」

【はい。】

それでも、今はまだ話せない。

【もう少し、待っていて下さい。】

眠くて最近、ぼうつとすることが増えた。

疲労しないはずの義体の身体なのに、少し怠さも感じる。

夕闇に包まれて赤く染まった校内に完全下校時刻を告げる放送が反響し、人気の無さを際立たせている。氏紙楓は、広げていた幾つかの荷物を自身の鞆に仕舞い、借りていた本を棚に戻して教室を出る。

徹底した秘密主義は私の悪いところだ。

分かっている。

それでも私は他人の精神性・安定性を信じることができない。

堅く秘匿することで、相手を傷付けていることも分かっている。

分かっている。

何が正しくて、如何すべきで、如何に私が間違っているかなんてことは分かっている。

それでも。

それでもだ。

届くかも定かでない制御も不能な状態に陥るリスクを冒すより、予測の付く不幸せを今回を選ぶ。如何に勝ち取るかよりも、如何に負けないかを選択する。

口が災いと成るなら閉じてしまえばいい。

私は後ろを向いて前向きに走ろう。

私が身体を向けている方向が私にとっての正面なのだから。

そう私に暗示をかける。

ゴムと砂と汗の混じった下駄箱特有の臭いの中、遅くまで残っていた子たちが「今日も

疲れたー」「早く金曜にならないかなー」なんて他愛のない言葉を交わしているのを、微笑

ましく耳に入れながら靴を履き替えて、私たちは校舎を後にします。

校門を少し抜けたところで、ぐんちゃんが立っていました。

声をかけようとしたところで私の言葉は遮られます。

「…私が何を言おうとしているか、分かっているのでしょうか？」

ぐんちゃんは、楓ちゃんを待っていたみたいです。

私は静かにしていた方がいいかな？

「……………私は貴方がわざとらしく嘘を吐いたから『それで何事も無ければいい』と静観

するつもりだった。：けれど、貴方は日が経つごとに様子がおかしくなっていく。

平静を取り繕えないのなら、今すべて話してしまいなさい」

【それはできない】

「何故？」

みんな貴方の不調に気付いているのだから『心配させるから』というのは無しよ」

ぐんちゃん：

「いつもの様に反論しないの？ それとも凶星だったかしら？」

【どうにもならないことに対する不安より、分からないことへの不安を取っただけです。】

「また貴方は勝手に『どうにもならないことだ』と決め付けて諦めているの？」

【ものの捉え方とか、そんな種類の話ではなく、事実、どうにもならないことです。】

「事情を説明しないまま、そんなこと言われても誰も納得しないわよ」

【どうにもならないことを、相対するわけではない貴女たちが知る必要はありません。】

「どうして貴方はいつも…！ いつも!! それで失敗したことをもう忘れてしまったの!？」

他人が向けて来る心配など知ったことではないとでも言う様に、楓は神経を逆撫でる。

【DEAD OR SURVIVE. シンプルにそれだけ分かっていたら別に良いじゃないですか。

何も本件に限ったことでもない。】

「それこそ、私たちに隠す必要はないでしょう？ 命懸けで戦っている私たちに、今更…」
【だからこそ、具体的に死を想起させることはしたくない。】

「…どうしてそうなのよ」

「おうおう、どないしたんや二人ともー」

「桐生さん…」

「何や知らんけど、こんな往来で寸劇しとったら通行の邪魔になるやろ？」

ハツとなつて周囲を見渡すと、騒ぎを聞き付けて人集りが出来始めていました。

ぐんちゃんも、それに気付いて居心地悪そうにしています。

「ご、ごめんね、ぐんちゃん！ 今度やる劇のそのあれがこうで、ええっとええっと！」

「あっはっは！ 素直が一番やんな！」

うう…、300年経つても説明するの苦手なままだよ… 嘘を吐くのはもつと苦手…

「せや！ どうせやったら、うちーの部屋で作戦会議しよやー！」

静ちゃんの発案で、私たちは楓ちゃんの部屋にいます。

ぐんちゃんは「明日も学校が…」って遠慮気味だったけど、静ちゃんに押し切られてしまいました。

でも本当は心配だから来たんだよね？

そういう、ぐんちゃんのとつても優しいところが私は大好き。

楓ちゃんは事情が事情だから断れなかったみたい。

「もうエエやんか、うっちー。話したりーや。」

分かっと思っけど、もう意固地になっても拗れるだけやで？」

【ダメです。】

「そこをなんとか！」

【ダメです。】

「ここだけの話、うっちーて可愛い男子に目が無いやん？」

【ダメです。じゃなくて】

「なあ、うっちー。 どうせやるんなら徹底せなアカンと、ウチは思うねん。

せやけど、うっちーは嘘が吐けんやんか。」

そんなで隠し通すんは、立ち回りに無理がある。

常に死と隣り合わせの勇者たちに、手の施しようのないマジな危機を伝えて悪戯に不安にさせたくないってのは分かるけども、うっちーは不器用やさかい思うように上手くいかんし、このままやと結局大差ない結末になる。

そんなん、うっちーにとっても都合悪いやろ？　ウチらに手伝わさせてくれんか？」

【合いの手を待たないのは、らしくないですね。】

「どうせうっちー声出えへんし、それに、この方がうっちーには早いやろ？」

【まあ…】

「よし！　そんなじゃ、洗いざらい吐いてもらいまひよかー！」

楓ちゃんが一瞬で説得されちゃった…どうして？

「桐生さんあなた凄いのね…たった数回の押し問答から、あつという間だったわ…」

「なんも凄いことあらへんよ。　ウチは、ちょっと口下手でツンデレなチーの言いたいことを代弁しただけやし（神樹様のフワツフワな神託を伝えるのに比べたらホンマ全然）」

「私は別に…」

「そんで、何があったんや？」

私はあの少女のことは伏せ、真つ暗な地下世界であること、地下洞窟や廃坑道の危険性、義体に成るときに失ったすべての五感が黄泉の国では有るということ、何らかの影響で進行性の思考力鈍化と倦怠感が発生しており、遠からず、話しかけられてもボヤっとした応答しかできなくなるだろうことを説明し、『黄泉下りに必要な極度に深い瞑想を確実に再現するために、日常生活の主体を神奈さんに委任し、普段から瞑想状態を維持することにした』ということにしてほしいと三人に依頼する。

「…よくもまあ、そんな言い訳が思い付くものね」

「マジで隠し通すの限界来とったんやんか。相談しいや、うっちー」

衝撃的絶望的眞実に世界は嘆き、慟哭し、終末を告げるファンファーレがヤカンから放たれ、桐生さんが私の頭を抱き、私の不実を批評を綴り溜息をこぼす些細な所作も郡さんの手に掛ければ映画のワンシーンの様に美しい… というのは嘘で、私の部屋にヤカンは無い。

：建前についてはまあ、そのときが来たら神奈さんに使うつもりだった台詞だし、瞑想深度が黄泉下りの潜行に有利に働く可能性があるのも本当のことだ。

以前にも言ったことだが『人を騙すのに嘘を吐く必要は無い』。

ちよつと認識を逸らして、尤もらしく腑に落ちる答えに誘導してやれば良いだけ。

一度腑に落としてしまえば、それが真実であるかどうかなど多くの人間は考えない。故に、嘘吐きだからといって人を騙し唆す詐欺師であるとは限らないし、詐欺師だからといって嘘吐きであるとは限らないし、事実と異なつたからといって嘘を吐いていたとも限らない。認識の錯誤により発せられた言葉かもしれないし、妄言だったのかもしれない。

生理的拒否反応を起こすので、私は嘘を吐くことが苦手だ。

*

黄泉下りから十日目で、明日水曜日が約束の十日目。

頭の回る何人かは瞑想設定のおかしな点に気がついていていた風だったが、同時に隠し事の意図にも頭が回っているようで追及はされなかった。

方向性はさまざまだが、彼女たちは皆共通して思いやり深く、慈悲と自己犠牲の精神にあふれている。そんな善良な彼女たちを騙すことに、わたしが申し訳なさを感じない日は無いが今のところ罪悪感を感じない。

約束は明日だが主任さんから連絡が入った。

すでに準備はできているとのこと。

日程に余裕をもって見積もりを出していたということだろうか。

まあ今はもう、神奈さんが主体として日常生活を送ってくれているので、急ぐ必要はないが、どうするか。

メールを読んだ神奈さんが「私が足になるよ！」と張り切っているけど、設定どおりずっと黙っていたので気付いていないのだろうけれど、すでに症状はかなり進んでいて……

……意識が朦朧としはじめています。

これはもしかすると……嘔み千切られた舌の流血が関係しているのかもしれない。

あの血液も私の魂の一部のはず。

なら流血による漏出によって意識に影響が出てもそれは道理。

……調査を急ぐ必要がある。

「——だからね。善は急げだと思うな！」

「……楓ちゃん？」

【起きてます】

「……そっか、今日は行くの止める？」

【いえ 行きましょう】

あしたも生きているとは限らない。

【移動 任せて良いですか？】

「うん。任せて」

歩く人。

自転車に乗った人。

座っている人。

立っている人。

盲者に「通りやせ」と音で知らせる信号。

車。

車。

車。

路上生活を強いられている哀れな猫。

コンビニの蜘蛛の巣にたまった羽虫の死骸。

木の上で鳴くキリギリスの仲間。

刈穂から零れた米を求めて群れをなすムクドリたち。

水路を流れる水の音。山間に響くトンビの声。

着いた。 ちよつと頑張ろうか。

「お待ちしておりました」

人を区別し記憶することが苦手な私には、前を歩く彼女がたとえ仮面を着けていなくとも十日前に会ったものと同じ人物か判らなかつただろう。

人間の顔なんてものはだいたい十数パターン程度で、何処かで見たようなものばかりだ。一度、ある神官に『その仮面は何のために着ける習わしなのか?』と聞いたことがある。するとその人は『個を棄て神に仕えるという証』なのだという。

しかし、果たして種を違う(たがう)神々に個人の区別が付くのだろうか?

私は疑問に思う。

『区別が付くのであれば何故、最前線で戦っている彼女たちまで殺そうとするのか』と私は疑問に思う。

何故人類のために彼女たちが身を捧げなければならなかつたのかと。私は疑問に思う。

『神の力を宿せるものが、そういうものだからだ』という理屈は理解している。

それでも『有象無象の民のために、無二の存在を焚き木にしては勿体ないだろう』と私

は思う。

『機械声帯をスピーカーに置換したい』という依頼でしたが、やはり安全面を考慮し『可能な限り、依り代としての精度を落とすべきではない』という結論となりました。

代替として、こちらのアプリをインストールすることで、任意に紐付けたスピーカーに音声情報を送信して使用することが可能となります」

なるほど。確かに君達の専門は機械工学以上にそっちだな。

魂がヒトガタを成し、喪失した部位と義体の機能がリンクしていたということは、人体に存在しない機能は奪えないのではないか？ というのが今回の狙いだっただから十分だ。

元々この義体は遠隔操作可能な仕様だから状態の変更によるリスクも少ない。

「アー」「アー イー ウー」

「如何でしょうか？」

「ウン。問Dアさスウドウ……すんエスギャツ ……必要デスネ」

（うん。問題なさそうデs……少し練習が…必要ですね）

テスト機体の遠隔操作のときは上手くできていたんだが…まあ調子悪いしな。

【ありがとうございます。練習は必要ですが思考とのラグも少ないので十分です。】

【後の方も宜しく願います。】

「いえ：不完全な仕上がりで納品することとなってしまい、申し訳ありません。期間を頂ける残り二つの案件で挽回させて頂きます。 …ところで楓さん。ネット上でこんな噂が拡散されているのですが、心当たりはありませんか？」

主任はそう言うと、デスク上で長年安置され続けて埃と脂でべとべととした質感を持つパソコンの液晶に、超古参大型コミュニティサイトのスレッドを一つ表示させる。

そこには、こう書かれている。

曰く。それは白髪であり、死装束を着ている。

竜王山でキャンプ中、角のようなものを生やした奇妙な人影を見たという話。

曰く。それは人知を超えた身体能力を誇る。

足摺岬で黒き仮面を着けた小鬼が山を飛び越え、赤く焼けた空に消えたという話。

曰く。それは呼吸を必要としない。

柏島の漁師が朝靄の中、白い和服を着た少女が海に入って行くので、奇異に思い様子を

眺めていた。ふと時計に目をいやると、15分経っても30分経っても海面に上がってこない。沖に流されたか、岩に足を喰われたかと思ひ、船のエンジンを吹かして船上から数刻探してみたが見つからず、諦めかけていたところ「ボンッ」と勢いよく水しぶきが上がった。『何事か』と振り向くが其処には既に何も無く、少し遅れて「ザアッ」と潮の雨が落ちてきたという証言。

その後、保安庁と連携して捜索を行ったが、ついぞ仏は上がらなかつたという記事。曰く。それは何かを探している。

四万十川流域で河原の石や流木をひっくり返したり、森の中で落ち葉を掘っていた。等、最初の目撃地が竜王山であつたことから『鬼ヶ白の鬼神の娘だ』などと面白がつて書かれている。

鬼ヶ白山には「鬼ヶ白荒神伝説」というものが伝えられており、曰く、里人を攫つては山頂にある巨石で突き殺していた鬼神に対し、それを見かねた海の女神が験比べを持ち掛けて、里人を突き殺すことを止めさせたという神話だ。

一通り概要を纏めたコメントに目を通した楓は顔を上げ、主任と目を見合わせる。楓には、その鬼の正体に心当たりがあつた。

【まあ、私ですね】

「ですよね…」

【なにか問題でも？】

「問題は………今はまだ起こっていませんが……」

あまり目立つようなことは控えるようにとお達しが出てましてね…」

実態は偶々深夜の竜王山で蟲取りをしていたところをキャンプ客に目撃されたり、歩いて帰るのが面倒で岬から跳んで帰ったり、ネットで素晴らしい透明度の海の写真を見て潜りに行ったり、オオゴキブリの餌の枯葉集めや、朽木拾いや、ムカデ捕りを行っていたけだった。

これら尋常でない機動性は神奈さんの影響と考えられる。

【検討させていただきます】

「それ、検討するだけのやつじゃないですか」

楓は少し返答を考えた後「ソレ デワア」とわざとらしい下手な発音で逃亡を図り、主任の技術者としてのプライドを逆撫でた。

事情を知らぬものが聴いたなら『馬鹿にしているのか』と怒りを露わにするところだったかもしれないし、事情を知っているものが聴いても喧嘩を売っている様にしか見えなかっただろう。

しかし彼は人類の命運を握る組織の技術主任であり、ミサイルも戦略兵器も通用しない神の使徒に対抗することができるとする神器や、それを振るう勇者たちの防護装束などを手掛ける部署の代表だ。今回のような不備が勇者たちの装備で起これば、忽ち人類文明は滅ぶ。

それは『彼らには、不備も失敗も許されていない』ことを意味し、彼にはその重責を背負う覚悟も誇りもある。

誇り高き彼が、自らの力不足を見せ付けられて、怒気を露わにするなど出来ようはずもなく、言葉を詰まらせてしまうのは自明の理であった。楓にそこまでの思慮は無かったが、結果的に楓の追及を逃れるという目論見は達成された。

*

「どうかな？ 楓ちゃん」

「ネミー」

「そうじゃなくって」

【要練習】

「じゃあ、帰ったら練習だね！ いくらでも付き合うよ！」

神奈さんと夜通し恋バナや武術談義に花を咲かせるのは吝か（やぶさか）ではないけれど……いやでも、もう、いつ意識を保てなくなっても不思議じゃないしな。

「楓ちゃん大丈夫……？」

私と神奈さんは一つの義体を共有している。

それはつまり、お互いに『互いの表情や不調のサインを知ることができない』ということであり、今はうちの部活の二重人格の後輩のように精神がリンクしていることもない。

……彼女は本来、朗らか（ほがらか）に明るく笑う人だ。

ただでさえ共感性が高く、他人が苦しむことや傷付くことを恐れる彼女にとって、唯一私の生存を確認できる会話が途切れることは、きつと、とても恐ろしいことなのだろう。

私はそこまで人間に関心を持ってないので共感能力は低い。

そんな、人と分かり合えない私だが、考察することはできるので、彼女の声色が心配そうに揺れることが日増しになっていく理由くらいは分かっているつもりだ。

だから、安心を提供できない私は、せめて愛おしい彼女に享樂を奉じたいと思う。

【何を話しましょうか？】

「…文字で書いて練習にならないよ？」

「ソーデン タワ」

「あははっ！ ホントのロボットみたい！」

「ガシャ…ン ガチョン… ナニカ サレタヨード ワ」

「ふっ…!! ふふっ…!! あはは!!」

互いの姿が見えなくとも、触れ合えなくても言葉遊びはできる。

彼女の笑い声が、私の為に装われたものではないと確証を持つことはできない。

けれど確かにそこには、言葉にされない感情の行き交いがあった。

「ヤンマーニ ヤンマーニ ヤンマーニ ヤンマーニ」

彼女は三百年前に一度世界を救い、自身の全てを神に捧げた。

人類の礎と成り果て『何者にも知覚されない不確かな何か』として永遠に彷徨い続けるはずだった。

それが今は、奇縁で私と共に在り、かつての友人たちとも談笑することができる。

「そうだ、カラオケいこう！ 明日はカラオケで練習しようよ、楓ちゃん！」

「オル様ノ ビセーニ 酔イシロロ…」

色々なものを失い過ぎていた私たちには、他愛のない遣り取りこそが至福で、くだらない会話が幸運で、幼い子供が、小石や、スナック菓子の箱を千切った紙屑を宝物と称する様に、どんなに些細なことも大切に大切に集めて胸に抱き続けた。